

るを傍觀し、敢て國難に殉せんともせず、遠く山中に遁逃して、苟も生を全ふせんと思ひし如き、卑怯未練の民族と變化したるぞ奇怪なる、是れ抑も何が爲めに然るか。予は是を喇嘛教心酔の結果なりと斷せんとす。

或人曰く、清廷は高祖以來、外藩制御の秘訣として、喇嘛教を利用して、以て慄悍なる蒙古人を軟化せしむるの政策を執り今日に至れり。蒙古族の現状は、即ち政策の當れるなり。清廷の得意想ふべし云々と。然り、予も亦其の消息を解せざるには非らず。然れども試に思へ、良藥も之を用ゆる其度を過ぐれば、啻に病を療せざるのみならず、其の本體を害し、遂に生命に關する大事と爲ること無しとせず。

清廷の政策は、當時に於て、確に適藥たりしを疑はず。否、現時と雖も宗教の利用は、爲政家の忘るべからざる一要件たりとするも、其の之を利用するの如何を顧慮せざるべからず。多少慄悍御し難き氣骨を有し、容易に外誘に應せざる氣風ありてこそ、支那帝國の藩屏と爲すを得べけれ。喇嘛あるを知りて、清廷あるを知らざるに至りては、啻に國家の用を爲さざるのみならず、虎視眈々たる隣國の籠絡する所と爲り、其の利用する所と爲り、却て國家の大害を醸すに至るは、觀易き道理なり。